

～大和市成人風しん予防接種のお知らせ～

生まれてくる赤ちゃんを「先天性風しん症候群」から守るため、
大和市では、成人風しん予防接種の一部公費助成を行っております。

※必ず、このお知らせを読んで理解してから予防接種を受けてください。

この予防接種は任意の予防接種です。効果や副反応について理解した上で接種するかどうかをお決めください。

1 対象者

接種日時点で19歳以上、かつ大和市に住民登録のある方で、以下の(1)または(2)に該当する方

(1) 妊娠を希望している女性（妊娠している方又は妊娠の可能性のある方は接種できません）

(2) 妊婦の夫またはパートナー（婚姻関係の有無は問いません）

※1 以下の方は、助成制度の対象外（全額自己負担）になります。

・風しんを含むワクチン（風しんワクチン、麻しん風しん混合(MR)ワクチンなど）の接種歴が2回以上ある方

・過去に、明らかに風しんにかかった方

・過去に、大和市成人風しん予防接種の一部費用助成を利用した方

※2 昭和37年4月2日から昭和54年4月1日生まれの男性は、国の風しんの追加的対策の制度をご利用ください

※3 女性は、接種後2～3か月は避妊をしてください。

2 接種期間 令和4年4月1日から令和5年3月31日まで

3 申請方法 接種前の申請が必要です。※申請後10日前後で市から必要書類を送付します。

・申請書を市へ郵送（〒242-8601 大和市保健福祉センター医療健診課）

またはFAX（046-260-1156） ※申請書は市ホームページからもダウンロードできます。

・電子申請

・電話 046-260-5662（受付：平日8:30～17:15）

※男性は申請時に、母子健康手帳の写し（生まれてくる子の母子健康手帳の出生届出済証明のページ、子の保護者欄を

ご記入ください）を添付していただく必要があります。

4 接種方法 「麻しん風しん混合(MR)ワクチン」あるいは「風しんワクチン」を1回接種

※過去に「麻しん」にかかった場合でも、「麻しん風しん混合ワクチン」を接種できます。

※新型コロナワクチン接種日の前後2週間は、他の種類のワクチンを受けられません。

5 接種場所 大和市予防接種協力医療機関

※予約が必要などところもありますので、接種する医療機関に確認してください。

6 自己負担額 各協力医療機関の接種費用から以下の助成金額を差し引いた額をお支払いください。

<助成金額> 麻しん風しん混合(MR)ワクチン：6,000円

風しん単独ワクチン：4,000円

7 持ち物

(1) 市から送付する通知書および大和市成人風しん予防接種予診票

(2) ご自身の母子健康手帳 ※妊婦の夫が受ける場合は、生まれてくるお子さんの母子健康手帳もご持参ください。

(3) 健康保険証

8 接種に当たっての注意事項

予防接種は、体調の良い日に行うことが原則です。健康状態が良好でない場合には、かかりつけ医等に相談の上、接種するか否かを決めてください

※なお、次の場合には予防接種を受けることができません。

- ① 明らかに発熱（通常 37.5℃以上をいいます）している場合
- ② 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな場合
- ③ 受けるべき予防接種の接種液の成分によって、アナフィラキシー（ひどいアレルギー反応）を起こしたことがある場合
- ④ 明らかに免疫機能に異常のある疾患を有する場合及び免疫抑制をきたす治療を受けている場合
- ⑤ 現在、妊娠している、またはその可能性がある場合
- ⑥ その他、医師が不適当な状態と判断した場合

【女性への注意事項】

妊娠している方又はその可能性がある方は、接種することができません。
妊娠していないことが確認された後、適当な時期に接種を受けてください。
なお、接種後2～3か月間は、妊娠を避けることが必要です。

9 接種後の注意

- (1) まれに接種後30分以内にアナフィラキシーという重いアレルギー反応が出現することがあります。接種を受けた後30分間は、接種を受けた医療機関で様子を見るか、医療機関とすぐに連絡を取れるようにしてください。
- (2) 接種当日は、過度な運動は避け、静かに過ごしてください。
- (3) 接種部位は、清潔を保ちましょう。
- (4) 接種当日の入浴はさしつかえありませんが、接種部位をこすることはやめましょう。
- (5) 接種後2～3週間は、健康状態や副作用に留意し、気になる症状がある場合は受診しましょう。
- (6) 女性の方は、必ず接種後2～3か月は避妊をしてください。

10 風しん及び麻しんの症状について

(1) 風しん

風しんは、風しんウイルスの飛沫感染によって発症します。潜伏期間は2～3週間です。風しんへの免疫がない集団において、1人の風しん患者から5～7人にうつす強い感染力を有します。軽いかぜ症状で始まり、発疹、発熱、頸部リンパ節の腫れなどが主な症状です。そのほか、目が赤くなる症状（眼球結膜の充血）もみられることもあります。合併症として関節炎、血小板減少性紫斑病、脳炎などが報告されています。平成30年～令和元年の風しんの流行（累計5,247人）で、血小板減少性紫斑病が21人、脳炎が2人報告されました。大人になってからかかると子どもの時より重症になります。

妊婦が妊娠早期に風しんにかかると、胎児にウイルス感染して先天性風しん症候群（難聴、先天性心疾患、白内障及び網膜症等）が高い確率で発生します。

(2) 麻しん（はしか）

麻しんは、麻しんウイルスの空気感染・飛沫感染・接触感染によって発症します。感染力が強く、予防接種を受けないと多くの人がかかる病気です。約10～12日間の潜伏期間の後、症状が出始めますが、主な症状は、発熱、せき、鼻汁、めやに、発疹です。症状が出はじめてから3～4日は38℃前後の熱とせきと鼻汁、めやにが続き、一時熱が下がりかけたかと思うと、再び39～40℃の高熱となり、発疹が首すじや顔などから出はじめる、その後、全身に広がります。高熱は3～4日で解熱し、次第に発疹も消失しますが、しばらく色素沈着が残ります。

主な合併症には、気管支炎、肺炎、中耳炎、脳炎などがあります。発生する割合は、麻しん患者100人中、中耳炎は約7～9人、肺炎は約1～6人です。脳炎は約1,000人に1～2人の割合で発生がみられます。また、麻しんにかかると数年から十数年かけて慢性に経過する亜急性硬化性全脳炎（SSPE）という重い脳炎を発症することがあります。これは、麻しんにかかった人のうち約10万人に1～2人の割合で見られます。麻しん（はしか）は医療が発達した国であっても、かかった人の1,000人に1人が死亡する重症の病気です。

1.2 予防接種の効果と副反応について

(1) 風しんを含むワクチンの効果

風しんを含むワクチンを1回接種することによって95%以上、2回接種することで99%以上の方が免疫を獲得します。体内に免疫ができると、風しんの患者さんと接触してもほとんどの場合発症を予防することができます。ただし、いつまで免疫が持続するかについては、獲得した免疫の状況や、その後の周りでの流行の程度等によって異なります。

(2) 風しんを含むワクチンの主な副反応

1回目のワクチン接種後2週間以内に発熱を認める人が約13%います。その他、接種後1週間前後に発疹を認める人が数%います。アレルギー反応としてじんま疹を認めた方が約3%、また発熱に伴うけいれんが約0.3%に見られます。2回目の接種では接種局所の反応が見られる場合がありますが、発熱、発疹の頻度は極めて低いのが現状です。稀な副反応として、脳炎・脳症が100万～150万人に1人以下の頻度で報告されていますが、ワクチンとの因果関係が明らかでない場合も含まれています。

接種後2～3週間は副反応の出現に注意してください。

1.3 予防接種による健康被害救済制度について

今回の接種で健康被害を受けた場合は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構救済制度による被害救済の対象となります。給付申請の必要が生じた場合は、健康被害を受けた人又はその家族が、直接独立行政法人医薬品医療機器総合機構に請求することになります。

<独立行政法人 医薬品医療機器総合機構 救済制度相談窓口>

電話 : 0120-149-931 (フリーダイヤル)

受付時間 : 月～金曜日 (祝日・年末年始を除く) 9時～17時

1.4 風しんQ&A

Q1 最近の風しんの流行状況を教えてください。

A1 平成23年から始まった風しんの流行により、平成24年～平成25年は16,730人の報告数となり大規模な全国流行となりました。この流行の影響で45人の赤ちゃんが先天性風しん症候群と診断されました。

また、平成30年7月から始まった風しんの流行は、抗体保有率が低い30代後半～50代前半の成人男性を中心に令和元年まで全国流行が続き、2年間で5,000人を超える報告数となりました。この影響で令和元年には5人の赤ちゃんが先天性風しん症候群と診断されています。

令和2年以降は、新型コロナウイルス感染症の流行で国内外の人の移動が激減したことから、報告数は減少しています。

Q2 妊娠している女性が風しんにかかるとどうなりますか。

A2 妊婦が妊娠早期に風しんにかかると、胎児にウイルス感染して先天性風しん症候群（難聴、先天性心疾患、白内障及び網膜症等）が高い確率で発生します。本人だけでなく、妊婦に風しんをうつさないよう、周りの方もワクチン接種や感染対策（咳エチケットや手洗い）を行い、風しんにかからない注意が必要です。

Q 3 男性でも風しん予防接種は必要ですか。

A 3 必要です。風しんは通常あまり重くない病気ですが、稀に脳炎、血小板減少性紫斑病などの軽視できない合併症を起こすことがあります。また、男性が風しんにかかった場合、妊娠初期の妻あるいはパートナー、職場の同僚等に感染を広げることで、胎児が風しんウイルスに感染し、生まれてくる赤ちゃんが先天性風しん症候群になる危険性が生じます。このことから、男性も風しんのワクチン接種を受け、免疫を持っておくことが重要です。

※本事業とは別に、昭和37年4月2日から昭和54年4月1日生まれの男性に対して、国は、風しんの追加的対策事業を実施し、対象者へ風しんの抗体検査・予防接種を無料で受けられる機会を確保しています（詳しくは厚生労働省や大和市ホームページをご覧ください）。

Q 4 風しんワクチンを受ける場合、特に注意することがあるでしょうか。

A 4 妊娠出産年齢の女性が風しんワクチンを接種する場合には、妊娠していない時期にワクチン接種を行い（あらかじめ約1か月避妊した後、接種することが勧められています）、その後2～3ヶ月間の避妊が必要です。妊娠中に風しんワクチンを接種したことで、胎児に障がいが生じたという報告は世界的にもありませんが、その可能性が完全に否定されているわけではありませんので、注意が必要です。男性の場合は、避妊の必要はありません。風しんワクチンを接種した男性において、風しんウイルスが精子で確認された、あるいはこれを起因として、その後妻やパートナー等で先天性風しん症候群を発症したとの報告は、これまでのところありません。

Q 5 こどもの時に風しんにかかったと親にいられていますが、予防接種を受ける必要はありますか。

A 5 風しんにかかったことが血液検査などで確かめられていない場合（風しんにかかった記憶だけの場合や、医療機関を受診していても症状だけからの診断で、診断が血液検査によって確認されていない場合など）は、風しんに似た他の病気にかかっていたり、記憶違いであることも考えられます。これまで風しんの予防接種を受けたことがなければ、なるべく早く予防接種を受けることをお勧めします。

Q 6 授乳期に風しんワクチン（もしくは麻しん風しん混合ワクチン）を接種すると、乳汁中に風しんワクチンウイルスが排泄されると聞きましたが、乳児に影響はないでしょうか。

A 6 風しんワクチンウイルスは乳汁中に排泄され、母乳で保育される乳児に一時的に抗体産生が認められると報告されています。しかし、乳児は無症状であり、抗体価も低く、かつ、一時的であってこのような形で乳児に風しんの免疫を与えるには至らなかったとされています。分娩後早い時期にワクチン接種を受けても、そのために授乳中の乳児に明らかな風しんの症状が現れることはありません。

【参考】

○ホームページ

- ・厚生労働省 http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou/rubella/
- ・NIID 国立感染症研究所 <https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/430-rubella-intro.html>

○文献

- ・2021 予防接種に関するQ&A集 一般社団法人日本ワクチン産業協会
- ・予防接種と子どもの健康 2021 年度版

＜お問い合わせ＞大和市医療健診課（大和市保健福祉センター4階）
電話：046-260-5662（平日8：30～17：15）